



冬のエレジー

マンドリンと弦楽トリオのための 現代邦人作品集

柴田高明 (マンドリン) Takaaki Shibata (Mandolin)

三戸素子 (ヴァイオリン) Motoko Mito (Violin)

河野理恵子 (ヴィオラ) Rieko Kohno (Viola)

小澤洋介 (チェロ) Yosuke Ozawa (Cello)

【収録曲】

藤井敬吾 (1956 -)

- ①-② アストロナム四重奏曲
Astronom Quartet (Keigo Fujii)

桑原康雄 (1946 - 2003)

- ③ 冬のエレジー
Elegy in Winter (Yasuo Kuwahara)

西澤健一 (1978 -)

- ④-⑥ マンドリンと弦楽三重奏の為のコンチェルティーノ
Concertino per Mandolino e trio d'archi op.78 (Kenichi Nishizawa)

小林由直 (1961 -)

- ⑦-⑨ マンドリン、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの為の四重奏曲
Quartet for Mandolin, Violin, Viola and Violoncello (Yoshinao Kobayashi)

マンドリンの“点”の音と

弦楽の“線”の音による魅力的な響き…。

18世紀ウィーンから現代までつながる

“マンドリンと弦楽トリオ”

伝統的な組み合わせに

新しい地平を切り拓く鮮烈の作品集！

new album 2014.3.16 on Sale

このアルバムについて

マンドリンが、クラシックの独奏楽器として約300年の歴史と、独自のレパートリーを持つ楽器であることは、残念ながらほとんど認知されていません。

マンドリンは、18世紀には協奏曲の独奏楽器として、また室内楽やオペラにおいて弦楽器や管楽器との組み合わせでも重用されるなど、クラシックの独奏楽器として一定の地位を築いていました。そして19世紀前半には一度人々から忘れ去られ、19世紀後半にトレモロを主要奏法とした楽器として復活、イタリアにてマンドリンオーケストラが開発され、世界に普及していった、という歴史があります。この流れの中で、18世紀のマンドリン音楽はその存在を忘れ去られてしまい、本格的な再発掘は20世紀中ごろのドイツの作曲家・研究者K.ヴェルキ(1904-1983)や、マンドリン演奏家であった越智 敬(1934-2010)、ウィーンのマンドリン演奏家V.ラドキー(1900-1971)らの活躍まで待たなければなりません。日本では、アカデミックな教育の不足から、18世紀マンドリン音楽の再発見が遅れており、この点で海外に比べ日本のマンドリン文化は遅れている、と言わざるを得ません。そして、この「クラシックの独奏楽器としてのマンドリン」の啓蒙は、私のマンドリン演奏家としての中核をなす活動となっています。

18世紀のマンドリン音楽の中心人物の一人に、ウィーンで活躍したジョヴァンニ・ホフマンという作曲家がいます。ホフマンは、特にマンドリンと弦楽という組み合わせの為に作品を残しており、協奏曲や、マンドリンとヴァイオリン、またヴィオラとの二重奏、そして“マンドリンと弦楽トリオ”の為に4曲の作品を残しました。

それから150年ほど後、ウィーンでマンドリン演奏家・教授として活躍した前述のラドキーが、ホフマンをはじめとするウィーン周辺で誕生した18世紀マンドリン音楽を再発見し、出版して広く世に紹介、そしてまた、同時代の作曲家に、マン

ドリンの為作品を残すよう働きかけました。この時、H.ガル(1890-1987)、A.カウフマン(1902-1980)、N.シュブロング(1892-1983)、A.ウール(1909-1992)、などにより、マンドリンオーケストラや、マンドリンを含む様々な編成の室内楽作品が残されました。その中に、ガル、ウール、カウフマンにより、“マンドリンと弦楽トリオ”の為の作品が残されているのです。ここに、18世紀にホフマンによって誇られた“マンドリンと弦楽トリオ”という種が、150年の時を超えて芽を出すことになりました。そしてこの種はドイツにも飛んでいき、H.ベンカー(1921-2000)、W.ホフマン(1922-2003)、A.シュトライヒャート(1936-)、V.エルドマン=アペーレ(1944-)などにより、この編成の為の作品が出版されています。こうして、作品の絶対数は決して多くはないものの、このマンドリンの「点」の音と、弦楽の「線」の音のよる魅力的な響きが、約200年の時を超えてつながっているのです。

しかし日本では、この“マンドリンと弦楽トリオ”という伝統的な組み合わせに対し、未だ十分に対応できていません。ホフマンなどの古典作品が上演されないだけでなく、現代においても十分なレパートリーが発表されておらず(唯一桑原康雄の作品を除き)、これは近代以降のヨーロッパでの取り組みに比べ、大きな遅れと言えるでしょう。こうした現状を打破すること、そして、マンドリンがクラシックの独奏楽器として広く認知される為には、より多くの良質な室内楽作品が必要であることから、今回のCD『マンドリンと弦楽トリオの為の現代邦人作品集』の着想に至りました。桑原康雄の作品以外は全て2012年から2013年にかけて委嘱した作品で構成されていますが、同じ現代の日本人による作品であっても、様々なスタイルの作品を集めたCDになるよう心がけました。このCDが、多くの音楽を愛する皆様の楽しみと、将来のマンドリンの糧となるよう、心から願います。

柴田高明

- 定価 2,600 円 + 税
- 品番: WNCD-1011
- JAN コード: 4582373240116
- 全国有名楽器店、Amazon.co.jp、他にて販売

発売元: ウッドノート・スタジオ
<http://www.kyoto.zaq.ne.jp/woodnote/>
woodnote@kyoto.zaq.ne.jp



Composer's Profiles

藤井敬吾 Keigo Fujii (1956 -)



北海道生まれ。ギタリストとしての活動の他、作曲家としても活躍し作品は多くの演奏家によって演奏、録音されている。日本の音楽をテーマにステージで演奏できる作品を作ることに力を入れている。ギターを岡本一郎氏、J.L.ゴンザレス氏に、作曲をC.ブライトン氏に師事。イギリスのギルド・ホール音楽院とスペインのオスカル・エスプラ音楽院に学び1985年、「ラミレス・コンクール」と「オレンセ国際コンクール」にて連続して第1位となる。1996年、青山音楽財団より「青山音楽賞」を授与される。イギリス、スペイン、ドイツ、アメリカ、スウェーデン、中国など海外でも多く演奏している。スペインのタレガ国際ギターコンクールの審査員に招待される他、国内のコンクールの審査員も務めている。京都市立音楽高校講師、大阪音楽大学非常勤講師。

桑原康雄 Yasuo Kuwahara (1946 - 2003)



日本を代表する国際的マンドリン奏者・作曲家。その演奏活動はヨーロッパ諸国を始め、アメリカ合衆国、ロシア、オーストラリアに至り、各国主要音楽祭の常連ゲストであった。詩人・萩原朔太郎生誕100年祭での音楽監督、スウェーデン政府委嘱の自作曲・マンドリン協奏曲「籟動」の放送初演、ユネスコ国際会議での震災レクイエムの放送などを始め、各国現代音楽祭にも主要ゲストとして招待を受ける。出版曲多数（主にドイツ）。1992～2000年にかけて計5回開催された神戸国際音楽祭は彼のライフワークであった。世界中のトップアーティストを一堂に会したその音楽祭は、「桑原康雄」だからこそ実現した、まさに夢のようなフェスティバルとなった。日本独奏コンクールやロシアの「北方杯」国際コンクール、プダシキン国際コンクールおよびドイツ国際マンドリン独奏コンクール審査員（現在の「桑原康雄」国際マンドリン独奏コンクール）を務める。

日本音楽交流協会議長。日本音楽著作権協会、日本作曲家協議会、神戸音楽家協会各会員。桑原マンドリン研究所主宰、アンサンブル・フィルムジカ（1989年神戸市長賞受賞）及びグループGEN（兵庫県芸術劇場公演多数）を主宰。

西澤健一 Kenichi Nishizawa (1978 -)



1978年東京生まれ。15歳よりピアノを始め同時に独学で作曲を始める。96年国立音楽大学入学。翌97年11月中退。作曲を故・満上日出夫、川島素晴両氏に師事。第4回東京国際室内楽作曲コンクール第1位をはじめ入選、入賞歴多数。01年10月に「7人の奏者のための室内交響曲」をシナロワ音楽祭の招聘作品として作曲し、アンサンブル団体「クライネス・コンツェルトハウス」によって同会場で初演され新聞各紙で高く評価される。また05年10月には第33回セルバンティーン国際芸術祭で「ピアノ三重奏曲第2番」が黒沼ユリ子氏によって團伊玖磨のオペラ「夕鶴」とともに日本のクラシック音楽作品として紹介され絶賛される。01年5月、6月にブリュッセルにて初の個展を2回にわたり開催して以来、独自の音楽活動を展開している。現在までに80曲以上を数える作品はそのほとんどが著名な演奏家より委嘱を受けて作曲されており、再演の機会も多く、好評を得ている。

小林由直 Yoshinao Kobayashi (1961 -)



1961年生まれ。幼少よりピアノを始め、ピアノを針谷宏弥氏に作曲を田中照通氏に師事。1984年日本マンドリン連盟主催第4回作曲コンクール入賞。以後、マンドリンに軸足をのこした作品を多く発表する。作品はヨーロッパ、ロシア、台湾など世界各地で演奏され、独奏作品は日本マンドリン連盟主催独奏コンクール、大阪国際マンドリンコンクール、ヨーロッパ国際マンドリンコンクール、ルクセンブルク国際マンドリンコンクール等の課題曲としても選定される。多くの作品が Joachim-Trekel-Musikverlag（ドイツ・ハンブルク）より出版されている。現在、内科医として勤務の傍ら、マンドリン合奏曲、室内楽曲などの作曲および指導を行っている。雑誌「奏でる！マンドリン」に「気まぐれマンドリン随想」を連載中。医学博士。日本作曲家協議会(JFC)会員。

Player's Profiles

柴田高明 (マンドリン) Takaaki Shibata (Mandolin)



photo by Trevor Mogg

ドイツ・カッセル音楽院器楽教育課程マンドリン科にて学ぶ。第15回日本マンドリン独奏コンクール第2位、シュヴァインフルト市第2回国際マンドリン独奏コンクール第3位、ザールランド州第2回ヨーロッパ国際マンドリン独奏コンクール第1位に入賞（共にドイツ）。故桑原康雄氏主宰のアンサンブル・フィルムジカのヨーロッパ公演に同行し、ドイツ、スペインにて演奏。2006年の帰国後より毎年サイトを開催し、これまでに、CD「麗しき薔薇を知る者」(共演：藤井敬吾氏(ギター))、「クロニクル」(共演：吉田剛士氏(マンドリン))を、またドイツにて「sky blue flower」(共演：C.ライアー氏(マンドリン・マンドラ))を発売。ザールランド州弦楽オーケストラと協奏曲を共演するほか、カッセル、マンハイムの各国立劇場管弦楽団と共演。ソリストとして、ドイツ、スペイン、神戸の各国際音楽祭に招待参加。現在はソロのマンドリン奏者として国内外で演奏活動を行う傍ら、各地で指導・審査・講評などの教授活動も行なっている。マンドリン専門誌「奏でる！マンドリン」では「マンドリン研究室」を担当し、マンドリンの歴史や奏法などに関する記事を発表している。木下正紀、G.ワイホーフェン、S.トレッケルの各氏に師事。

三戸素子 (ヴァイオリン) Motoko Mito (Violin)



桐朋学園大学卒業後、81年渡欧。スイス・ヴィンタートゥール音楽院を経てザルツブルグ・モーツァルテウム音楽大学卒業。篠崎功子、中山朋子、A.P.シュトゥッキ、H.ツェルトマイヤー、堀川悠子他の各氏に師事。N.ミルシュタイン、F.サモヒル、G.シュルト、M.プレスラー、アマデウス弦楽四重奏団他のマスタークラスに参加。在学中に「ザルツブルグ国際モーツァルト週間」でソリストとしてデビュー以来、ヨーロッパ全域の音楽祭や音楽協会主催のサイトラ等で演奏している。これまでハンマーフェルトとのモーツァルトのソナタ全曲、プラームス及びベートーヴェンのソナタ全曲、バッハ無伴奏全6曲、ハンガリーにてバルトーク等に取り組んできた。国内外でコンサートマスターとして、またソリストとしてオーケストラとの共演も多数。室内楽では「ザルツブルグ弦楽四重奏団」を経て、87年に結成した「サント・フローリアン三重奏団」でNYカーネギーホールをはじめヨーロッパ、北米、アフリカ諸国で演奏している。また海外の演奏家との共演が多いため、日本国内の演奏家を中心とするグループ「クライネス・コンツェルトハウス」を主宰、弦楽四重奏・八重奏・弦楽合奏団、管弦楽団と意欲的なプログラムを展開。CD録音ほかNHK-FM、オーストリア国営放送等世界各国の放送に出演。

河野理恵子 (ヴィオラ) Rieko Kohno (Viola)



東京生まれ。5才よりヴァイオリンを始め、北鎌倉女子学園高校、音楽科在学中、ヴィオラに転向する。東京芸術大学、音楽学部器楽科ヴィオラ専攻卒業。ヴァイオリンを、広瀬八朗、中嶋郁子、海野義雄、ヴィオラを、浅妻文樹、梶東俊之、百武由紀、店村眞棋、クロード・ルローンの各氏に師事。ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽院夏季講習会、ニューヨークに於いて、ポール・ドクトール氏に学ぶ。第10回芸大室内楽定期演奏会、第90回神奈川新聞室内演奏会に出演。87年、関内ホールにて、デビューサイトを開催。神奈川フィルハーモニー管弦楽団に在籍、首席奏者も務めた後フリーとなる。その後、オーケストラの客演首席、ソリストとしての共演、各地でのソロのコンサートを、意欲的に行う一方、室内楽奏者としても活動中。音楽祭、TV、ラジオ、ライブ、DVD、CD録音等にも参加し、多岐のジャンルで、幅広く演奏を行っている。又、コンクールの審査や、講師を務める機会も多く、後身の指導にも力を注いでいる。97年、O.K.S.Q.のメンバーとして、CDをリリース。12年、ヴァイオリンとのデュオ「Mellow Ry」を結成し、ジャンルにこだわらない独自の音楽を発信している。現在、東京室内管弦楽団、首席奏者。埼玉アーティストボランティアバンク会員。

小澤洋介 (チェロ) Yosuke Ozawa (Cello)



オーストリア国立ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽大学卒業。85年より2年間トロント大学においてV.オルロフに師事。1989年より1992年までザルツブルグ室内オーケストラの首席チェリストを務めたことから、ソリスト及び室内楽奏者としてアムステルダム・コンセルトヘボウ、ウィーン楽友協会等、ヨーロッパ各地で演奏。12年にわたる海外生活の後、92年より日本に本拠地を移し、以来ソリストとしてオーケストラとの共演や指揮、チェロ一本の独奏による「小澤洋介の世界」、また国際的に評価の高い「サント・フローリアン三重奏団」で93年バンフ国際音楽祭招聘アーティスト、96年ニューヨーク・カーネギーホール演奏会、99年には350年の伝統を誇るスイス・ヴィンタートゥール音楽協会のコンサートに出演等、多彩に国際的に活躍。また室内楽シリーズ「クライネス・コンツェルトハウス」を94年より主宰し、01年メキシコ・シナロワ州の招待によりメキシコ演奏旅行、また02年日本R.シュトラウス協会例会に出演、また同年の第12回定期演奏会が「音楽の友コンサート・ベスト」に推挙される。2007年ティモシー・レーベンスクロフトと共に10年来のベートーヴェンの「チェロ・ソナタ」の全曲演奏会を再び行ない、「これはひとりの演奏家が成し得た」快挙」といっていい」と評される。(音楽の友2007年8月号)



CD 好評発売中！

柴田高明 feat. 吉田剛士

クロニクル

マンドリン音楽の300年

全曲マンドリンのためのオリジナル作品、18世紀から現代までマンドリン音楽300年の歴史を駆け巡ります。18世紀と現代の2種類の楽器を使い分け、その魅力を多彩に表現。吉田剛士との共演でピリオド楽器の二重奏、吉田の新作〈マンドリン0.024ppm〉初録音も話題です。「レコード芸術」誌 特選盤！ (2011年4月号)

発売元：ウッドノート・スタジオ
http://www.kyoto.zaq.ne.jp/woodnote/
woodnote@kyoto.zaq.ne.jp

●定価 2,500円＋税
●全国有名楽器店、Amazon.co.jp. にて販売中